

日本人の宗教観を考える

社会科B班 中野 雅稔

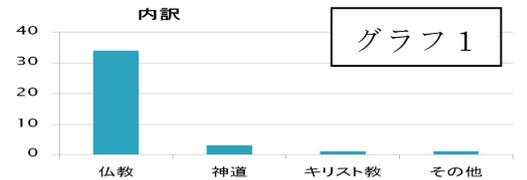
1. はじめに

日本人の宗教観は、他国と大きく異なっている。外国人に対して日本人の宗教に関して説明することが難しいという話を聞いたことがある。自分自身も日本人の宗教観に関して深く考えたことがなかったのでこの機会に調べてみることにした。

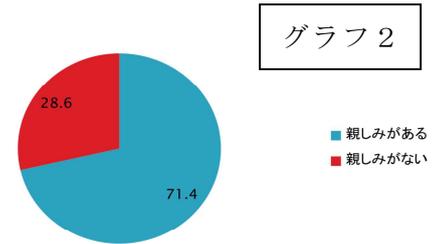
2. 日本人の宗教に関する意識

まず初めに、現代日本人の宗教に関する感じ方を ISSP（国際比較調査グループ）の世論調査より調べた。

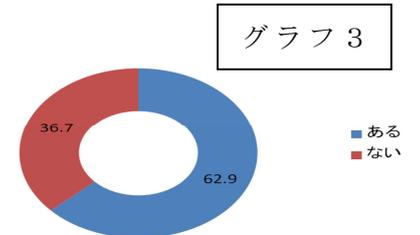
初めに「何か宗教を信仰していますか」という問いに対して「信仰している」と答えたのは約39%であった。内訳としては多い順に仏教・神道・キリスト教であった。（グラフ1）



次に「自分の信仰している宗教を含め、親しみのある宗教はありますか」という問いに対しては約71%が「親しみのある宗教がある」と答えた。この質問に対しても内訳は多い順に、仏教・神道・キリスト教の順となった。（グラフ2）



最後に「何か重大な問題にぶつかったときに、神や仏に祈ったことがあるか」という問いに対しては「祈ったことがある」という人は約63%であった。（グラフ3）



以上の世論調査の結果より、何か宗教を信仰している人は多くはないが、親しみをもって宗教にかかわっている人が多いということが考察される。

3. 歴史的背景

世論調査でも各項目で上位を占めていた仏教と神道が合わさった日本独自の神仏習合について調べた。

初め、仏教伝来時は蕃神（となりのくにのかみ）と呼ばれ、日本の神と同質の存在として認められた。その後、聖武天皇の大仏建立が推進されていく中で、当時の日本では産出はないと思われていた金が産出されたことが、神と仏が力を合わせた結果もたらされた奇跡として考えられ、その後朝廷へ進出していった。そして神仏習合思想が進歩していく中で、寺院の境内近くに「神宮寺」を建立したり、日本に神に対して「菩薩」の称号を与えたりした。そして、この進歩の中で仏教と神道で差ができた。神道には、特定の教義や理論はない。それに対して仏教には深い理論体系がある。この差によって仏教が神仏習合に関して優位となった。そして、本地垂迹思想が生まれた。本地垂迹思想とは、日本の神道における神は、仏が姿を変えて現れたという思想である。

しかし、この思想はあまり長くは続かなかった。その原因は、元寇である。元寇の際、日本側は不利な状況に置かれていたが、「神風」とよばれる風によって元軍は退却したということが二度あり、その風は日本の神によって吹いたと考えられ、今度は日本の神が優位となった。そこに反本地垂迹思想が生まれた。これは、先ほどとは逆に、仏は神が姿を変えて現れたという思想である。

こうして神と仏は交互に優位な立場となって年月が過ぎていった。神仏習合の次の転換点は、明治政府による宗教政策であった。明治政府は、天皇の権威を高めるために神道を中心とした国家体制を目標とした。その一環として、永く続いた神仏習合を切り離そうとした。切り離すために明治政府は神仏分離令を出した。政府としては分離のみが目的であったが、結果として「廃仏棄釈」という民衆運動を引き起こしてしまう。このことによって、寺院が破壊され、僧侶も神職への転向をした。この体制は、太平洋戦争終結まで続いた。戦後、GHQによって現在のような体制となった。しかし、長年の間神仏習合の考えが日本人に浸透していたので、どんな宗教に関しても寛容な考えが生まれたと考えられる。

4 . 現 在 の 日 本 人 の 宗 教 観

世論調査と神仏習合から現在の日本人の宗教観に関して考える。前記の世論調査の結果の中で、全体の約6割が宗教を信仰していないと答えたが、宗教行事を行う日本人はもっと多い。例としては、クリスマスが挙げられる。日本ではクリスマスには、イエス・キリストの生誕を祝っている人は、純粋なキリスト教徒以外ではみられない。それでは何故日本ではこれほどクリスマスが賑わうのか。これには、日本人の宗教に関するある傾向が関係する。その傾向とは、日本人は一般の風俗習慣となった宗教行事は、宗教とは切り離され単なる行事として認識する傾向である。宗教行事を習慣として認識する傾向があるため、宗教的なものを信じている人が、宗教を信仰している人より多いという結果となった。

それでは、日本人は宗教をどのように認識しているのか。日本人は特定の人物や団体が特定の教義を唱え、それを信じる人がいる宗教のことを、宗教と捉える。このような宗教のことを「創唱宗教」と呼ぶ。例として、キリスト教や仏教、イスラム教などがある。

これに対して、自然に発生した宗教を「自然宗教」と呼ぶ。例として、神道やアニミズムがある。自然に発生した宗教なので特に関心を持つことなく、しかし祈ったりしながら過ごしてきた。これについて日本人は、宗教として意識している人は多くはない。日本人は「自然宗教」を無意識に信仰している。自然宗教を意識せずに信仰している例として、大みそかの夜に寺院で除夜の鐘を聞き、年が明けると、神社に初詣に行くという行動だ。

以上の結果より、日本人は自分自身を無宗教だと思い込んでいるが、意識せずに信仰心を持っているため、自分自身の宗教観に関して自覚がない。また、神仏習合の初めの段階としてあった、仏を日本の神と同質の存在として認められたので、その後入ってきたさまざまな神仏についても同じように認めてきたと考えられる。また、仏を日本の神と同質の存在として認めたのは、八百万の神のひとつとして捉えたと考えられる。

5 . 参 考 文 献

- 『神仏習合』 達日出典 著 六興出版
『日本人はなぜ無宗教なのか』 阿満利磨 著 ちくま新書

